

# 白銀の天翔 揺り籠の夜宴

【新たな白銀の戦乙女の絶頂トランス♡】

【完璧な女王が磔 機械姦♡】

【聖女たちが特攻してイキ死め♡】

【最強対最凶の最終決戦！】

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ\_L

# 白銀の天翔

## 揺り籠の夜宴



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ\_L

# 序章:揺り籠に響く鉄槌の音

聖暦2055年。

荒廃した地球を捨てた人類が、星々の海に新たな故郷を求めて四半世紀。

巨大な旅客宇宙船の眩い航跡の裏側には、決して目を向けてはならない暗部が存在する。

女性の性エネルギーを強制的に抽出し、莫大な動力へと変換する禁忌の機構——『オルガシステム』。

少女たちの尊厳をすり潰す歪な礎の上に、この宇宙の秩序は成り立っていた。

そのシステムを最も冷酷に工業化し、圧倒的な物量と軍事力で宇宙の覇権を握る「世界統合連合」。

絶妙に保たれていた宇宙の均衡が崩れたのは、数ヶ月前のことだ。

連合が、惑星ペルセポネの静止軌道上に研究ステーション『ヘカテ』を秘密裏に建造しているという凶報がもたらされた。

『ルミナ・リリウム』。

人間の女性の子宮を苗床とし、絶頂のオルガズムをトリガーとして命を吸い尽くし狂い咲く、悪魔の原生植物。

連合は数千人もの女性をヘカテへ収容し、全自動のオルガデバイスへ拘束した。

無重力・無菌の環境下で「強制受胎と収穫」を繰り返すという、冷酷な工業的栽培に着手したのだ。

その花から精製される新型薬液は、連合の無人AI機「ハウンド」の群れを一機残らずエース級の怪物へと変える。

それは全勢力にとって、絶対的な死の宣告であった。

沈黙の恐怖の中、全勢力の打算と陰謀がひとつの狂気へと収束する。

連合の非道を「魂への冒涇」と断じ、ステーション破壊のためならば信徒の命さえ喜んで使い潰すであろう唯一の宗教組織——アセンション・シスターズへの裏工作である。



スカイヴェイルからは奇跡の機体を完成させるための『白銀の奈落のデータ』と最新のナノ技術が、ネオ・テランからは莫大な軍資金と鹵獲兵器が水面下で供与された。

そして今。

連合の目を欺くための、白と金に彩られた偽りの巡礼船団。

その群れに紛れ、漆黒の宇宙を滑るように進む一隻の特攻艇『殉教者（マター）』があった。

極狭のコックピットの中で、名もなき若い修道女はひたすらに祈りを捧げている。

傍らの補助席では、ナビゲーターを務める男性信者が硬い表情で計器を睨んでいる。

彼の冷徹な視線と死の恐怖を感じながら、少女はすでに機体の動力源へ接続され、秘部の最奥には無機質で冷たいオルガデバイスが深々と挿入されていた。

純白と金の極薄バイオポリマースーツが、極度の緊張と脂汗で肌にねっとりと張り付く。

「あ……んっ、神、よ……どうか、我らに……っ」

巡礼船団の偽装を維持するため、機体は最低限のアイドリング状態に抑えられている。

しかしそれは、いつでも最大出力を引き出せるよう、微弱な快感のノイズで意図的に母体を焦らし続けるという生殺しの拷問でもあった。

迫り来る死への絶対的な恐怖と、男の隣で子宮を強制的に疼かされる羞恥。

涙と、熱を帯びた濡れた吐息。

大国の薄汚い打算すらも、彼女たちは純粋な信仰心を燃やすための神聖な薪へと変えていた。

作戦名、『揺り籠への鉄槌（クレイドル・ハンマー）』。

それは連合の野望を粉碎する聖戦であると同時に、少女たちの気高き魂が絶対的なシステムの蹂躪に試される、あまりにも残酷な旅立ちであった。

# 第一章:聖戦の序曲

——数時間前。

聖櫃艦『アーク』第一格納庫。

祈りの前の重い静寂と、出撃を待つ兵器たちの低い駆動音が、巨大な格納庫を満たしている。

焦げたオゾンと冷たい機械油の無機質な匂い。

しかし、それ以上に空間を支配していたのは、むせ返るような雌の熱気だった。

百名を超えるバトルシスターたちが、その場に膝をつき祈りを捧げている。

彼女たちが纏うのは、純白と金のオルガスーツ。

四肢を覆う無骨な聖なる装甲とは対照的に、胴体や腰回りを包む極めて薄いバイオポリマー生地は、身体の曲線へねっとりと張り付いている。

これから始まる聖戦への極度の昂ぶりからか、彼女たちの肌は熱を帯び、白い布地は甘い汗で微かに湿っていた。

豊かな胸の膨らみや、硬く尖り始めた乳首の輪郭が浮き彫りになる。

さらに、秘裂の頂である愛核（クリトリス）の最奥に埋め込まれた『聖印（マイクロチップ）』から絶え間なく送られる微弱な快楽信号が子宮を疼かせ、スーツのクロッチ部分には濃密な蜜の染みが広がっていた。

彼女たちにとって、その疼きと濡れた吐息こそが、神への敬虔な祈りそのものであった。

彼女たちの前には、この作戦の最高指揮官である第五代聖女長ベアトリーチェが、ただ一人静かに立っている。

彼女もまた、指揮官としての風格を纏う闇色のオルガスーツに身を包んでいた。

三十代の成熟した肉体が放つ圧倒的な曲線美を漆黒の極薄スーツが冷酷に包み込んでいる。



歩みを進めるたび、彼女の下半身では『待機状態』のデバイスが秘かに蠢き、強靱な理性を密かに試していた。

いつでも戦闘モードに切り替われば、即座に生体炉心と直結するその存在は、聖女長としての彼女の覚悟を静かに物語っていた。

隙のない夜会巻きに結われた髪は、格納庫の照明を吸い込むように深い。

その蜂蜜色の瞳だけが、これから死地へと赴く姉妹たち一人一人を慈しむように見つめていた。

少し離れた場所では、フランドルが自らの機体「アークエンジェル」の白い脚に寄りかかり、静かにその光景を見つめている。

彼女が纏う極薄の礼装『ダイブ・ソウル』は、華奢な身体に不釣り合いなほど豊満な乳房の曲線をありありと描き出していた。

透明な生地の内には、蜘蛛の糸よりも細い銀色の『生体センサー・フィラメント』が無数に織り込まれている。

それは彼女の白磁のような素肌へねっとりと密着し、特に豊かな双丘の膨らみと、その頂点にある突起の輪郭を執拗になぞるように複雑な回路を描いていた。

フィラメントは彼女の静かな心拍や、微かな緊張によって乳首が硬く尖るといった微細な生体反応を検知するたび、まるで生きた電子の血管のように青白い光を脈動させ、そのデータを背後の機体へと伝達している。

熱狂するシスターたちの集団の中で、すでに機体と半ばリンクしている彼女の冷ややかな機能美は、明らかに異質だった。

やがて、ベアトリーチェはゆっくりと口を開いた。

その声は拡声器を通していても関わらず、まるで一人一人に直接語りかけるように優しく、そして力強かった。

「我が愛しき姉妹（シスター）たちよ。……わたくしたちがなぜ今ここにいるのか。その理由をお話します」

彼女は、数日前に諜報網からもたらされたヘカテ・ステーションの真実について語り始めた。

何千もの女性たちがただの「苗床」として、意識さえも奪われたまま冷たい手術台に拘束されていること。

全自動の機械アームによって魂のない快樂を与えられ続け、子宮に異形の種子を植え付けられること。

そして、終わらない絶頂を燃料として命を吸い尽くされ、花が咲くと同時に「廃棄物」として処理されること……。

「連合はそれを『効率』と呼びます。命をすり潰し、終わらない絶頂という地獄を与え、魂を冒瀆するその所業を、奴らは『生産』と呼ぶのです！」

ベアトリーチェの声に、凄まじい怒りの色が滲む。

その激情に呼応するようにシスターたちの呼吸が荒くなり、スーツの胸元が大きく揺れた。

むせ返るような蜜と汗の匂いが、さらに色濃く空間を満たす。

「我らが施しは交わる魂の救済！ 孤独に震える魂を我らが肉体の温もりで包み、生きる希望を与えるための神聖な儀式です！ しかし奴らの行いは何か！ それは魂を砕き、尊厳を弄ぶための虚ろな陵辱にすぎません！」

シスターたちの間に、静かな、しかし確かな怒りのどよめきが広がる。

ベアトリーチェは一度目を伏せ、遠い日を思い出すかのようにそっと呟いた。

「.....わたくしは、先代アガサ様が眠るあの聖なる回廊で誓いました。歴代の聖女長たちがその身を捧げて守り抜いた、我らが信仰の尊さを。アガサ様はその最後の奉仕を終える間際、こう仰った.....『我らが捧げるものは肉体にあらず。その魂の輝き、慈悲の心そのものである』と.....」

彼女は再び顔を上げ、その蜂蜜色の瞳を燃え上がらせた。

「姉妹たちよ！ ヘカテで眠る同胞たちは、もはや肉体的には救えません！ ですがその魂までをも、連合の偽りの神々に好きにさせてはなりません！ 我らがこれから行うはただの破壊ではない！ 魂の解放です！」

彼女の言葉が、バトルシスターたちの心を一つにする。

死への恐怖は完全に消え去り、その瞳には狂信的なまでの光が宿っていた。

「死を恐れるな！ 我らが流す血は、未来の姉妹たちが流すであろう涙を拭うための聖水となる！ 我らが肉体は滅びようとも、その魂はこの聖戦の伝説と共に永遠に生き続けるのです！」

ベアトリーチェは天に拳を突き上げた。

「立て！ 我が気高き戦士たちよ！ 今こそ我らが祈りを鉄槌へと変え、冒涇の揺り籠を打ち砕く時！」

「「「おおおおっ！！！」」」

地鳴りのような雄叫びと共に、百名のバトルシスターが一斉に立ち上がる。



彼女たちの顔は信仰の熱に紅潮し、甘い汗でさらに透き通った純白のスーツが、官能的なまでにその肉体の覚悟を晒していた。

「我らが槌を、偽りの神々へ！」

「「「魂に、救済を！！！」」」」

熱狂の渦の中心で、ベアトリーチェは満足げに頷く。

彼女は自らも踵を返し、陣頭指揮を執るための強襲艇「シャドウ・ピルグリム」へと確かな足取りで向かっていく。

その背中を、フランドルはただ黙って見送っていた。

銀色のフィラメントを明滅させる彼女の青の瞳に宿る光は、熱狂する他のシスターたちのそれとは、明らかに違う色をしていた。

## 第二章:大天使の目覚め

聖櫃艦「アーク」の最も奥深く、神殿のように静まり返った第一格納庫。

その中央に、一機のオルガマシンが静かに佇んでいた。

ASC-X01 アークエンジェル。

かつてセラフィック・オーダーの理想を体現したオルガマシン「セラフィム」の流麗な騎士の姿を骨格としながらも、その様相は大きく異なっていた。

教団の象徴である純白と金の装甲。

だが、その継ぎ目やスラスターノズルには、スカイヴェイルの技術の証であるサファイアブルーの発光ラインが、まるで血管のように神秘的な光を脈動させている。

何よりも見る者の目を奪うのは、背部で静かに折り畳まれた巨大な翼だった。

それは無骨な金属ではなく、一枚一枚が光の粒子で構成されたかのような「ナノ・フェザー」の集合体であり、この機体がただの兵器ではない、神聖な奇跡であることを物語っていた。

その神々しいまでの機体の、純白の脚に背中を預け、銀髪の少女フランドルは静かに瞳を閉じている。

彼女が纏う極薄の礼装『ダイブ・ソウル』は、その華奢な体格と、母譲りの豊満な乳房の曲線を、神聖なまでに描き出していた。

格納庫の隅で待機する他のシスターたちが、畏敬の念を込めて彼女に視線を送っている。

——白銀の戦乙女の再来。

いつしか、フランドルはそう呼ばれるようになっていた。

かつて連合を震撼させた伝説の聖女と同じ、銀の髪と青い瞳を持つ、教団の新たな希望として。

「……怖気付いたか、フランドル」

静寂を破ったのは、低く、落ち着いた声だった。

声の主は、聖騎士長ユーディット。



短く刈り揃えられた赤錆色の栗毛と、眉の上の古い傷跡が、彼女の歴戦の勇士としての存在感を際立たせる。

彼女もまた闇色のオルガスーツを身に着けているが、その鍛え上げられ、引き締まった大人の肉体は、フランドルのような少女のそれとは違う、鋼のような強靭さを放っていた。

「……いいえ、ユーディット様」

フランドルはゆっくりと瞳を開けて首を振った。

「ただ.....祈りを」

「祈り、か」

ユーディットはフランドルの隣に立つと、同じようにアークエンジェルの巨体を見上げた。

「お前ほどの『奇跡』が、今更なにを神に祈る」

その言葉に、フランドルは少しだけ寂しそうに微笑んだ。

「奇跡、なのでしょうか。私には.....分かりません。ただ、私があ  
の玉座に座ると、とても遠い場所から、誰かが歌っているような声  
が聞こえるのです。優しくて、少し悲しい歌声が.....」

それは、フランドル自身は知る由もない、かつて自らの命を燃やしてこの子を守り抜いた母、イラストリアスの魂の残響かもしれない。



ユーディットはそれ以上何も言わず、ただフランドルの肩に、ぽん、と無骨な手を置いた。

「お前の母も、父も、立派な戦士だったと聞いている。お前も、その血を引いているだけだ。.....気負うな。お前はただ、お前の信じるままに、その翼で舞えばいい」

ユーディットは、フランドルの出自の真実を知る、数少ない一人だった。

彼女の言葉は、単なる上官としての激励ではない。

戦場で親を失い、それでも戦い続けなければならない者同士の、静かな共感と労りに満ちていた。

「ユーディット様.....」

「宇宙（そら）の指揮は、私が執る。お前は、敵の王だけを見ろ。.....必ず、生きて帰ってこい。ベアトリーチェ様がお待ちだ」

それだけ言うと、ユーディットは踵を返し、ブリッジへと向かう。

一人残されたフランドルは、再びアークエンジェルを見上げた。

その青の瞳には、もう迷いはなかった。

「.....行きます」

誰にともなく呟くと、彼女の意思に呼応するように機体の純白の装甲が滑らかに開き、内部のコックピット『祈りの玉座（プレイヤー・スローン）』が静かに彼女を迎え入れた。

フランドルがその玉座に深く身を沈めると、極薄の礼装『ダイブ・ソウル』がシステムと瞬時に接続された。

透明な生地走る銀色のフィラメントが脈動し、彼女の体温、心拍、そして極限の緊張によって硬く尖り始めた乳首の生体データを冷酷に読み取っていく。

同時に、玉座のシートから伸びた無数の銀色の超微細フィラメント、そして中心に据えられた強固な一対のメインデバイスが、彼女の下半身へと滑らかに這い寄った。

礼装『ダイブ・ソウル』の股間部は、デバイスの侵入を正確に迎え入れるよう、あらかじめ二つの割れ目を露出させるスリット形状に仕立てられている。

彼女の特異な体質に合わせて極秘裏に設計された、聖体融合型オルガデバイス。

フランドルが息を呑む間すら与えず、そのデバイスは彼女の潤う二つの蕾——蜜壺とアナルへ同時に、音もなく滑り込んでいく。

肉を押し広げる確かな質量があるはずなのに、そこには拒絶の痛みも、引き裂かれるような圧迫感も一切ない。

それどころか、最初から彼女の肉体の一部であったかのように、滑らかに、心地よいぬくもりと吸い付くような快感だけを伴って、最奥の最深部まで融け込んでいく。

オルガシステムとの『聖体融合』。

質量感があるにも関わらず、痛みすら感じさせないことへの、奇妙で不気味なほどの恐ろしさ。

だが、次の瞬間に神経ハックによる甘美な信号が脳を白く染め上げ、それは肉体と機体が完全に一つになるという、圧倒的な全能感へと書き換えられていった。

子宮の最奥がじわりと熱を帯び、彼女の意識は物質の境界線を超えて拡大していく。

眼前のホログラフィック・スクリーンに、純白の翼を持つ天使の紋章と共に、機体の識別コードが浮かび上がる。

——ASC-X01 ARCHANGEL。

システムチェックのデータが、ダイレクトにフランドルの感覚へと流れ込んできた。

携行する主兵装『セラフ・ライフル』。

そのエネルギー充填が完了したという確かな手応えが、彼女の右腕そのものの重みとしてフィードバックされる。

長距離狙撃と広範囲制圧、二つの顔を持つこの兵器は、すでに彼女の四肢の一部だった。

腰部に格納された近接兵装、聖剣『浄罪の光（ピュリフィケーション）』。

そのプラズマ発生器が、パチパチと神経を刺激するような熱を帯びて静かにその時を待っている。

背中の中からは、全十二門のナノミサイル・ランチャーのロックが解除されたという駆動感が、彼女の背骨を通じて伝わってくる。

空間を制圧する六機の『セラフィック・フェザー』の待機アイコンが、彼女の思考の周りを衛星のように回り始めた。

攻撃、防御、そして幻惑。

六枚の光の翼は、彼女の手足のよう、完璧にその意識と繋がっている。

最後に、機体の影に隠れるように表示される、無骨な散弾銃——『告解（コンフェッション）』。



ネオ・テラン同盟製の兵器を裏ルートで入手し、教団向けに改修したその実弾兵器だけは、高テクノロジーの結晶である大天使のシステムの中で、異物としての冷たさと、重厚な金属の硝煙の匂いを彼女の脳に訴えかけていた。

だがそれは同時に、血の通った泥臭い暴力の感覚として、あまりにも頼もしい存在感でもあった。

特殊システムの項目には、三つの輝くコードが並ぶ。

——セラフィック・ウィング。

——エコーズ・レゾナンス。

——トランスM。

すべての兵装とシステムが、彼女の命令を待っている。

フランドルはゆっくりと操縦桿を握りしめた。

熱を帯び、潤んだその青の瞳には、これから始まる聖戦への、静かで、しかし揺るぎない覚悟の光が宿っていた。

### 第三章:女王のチェス盤

研究ステーション「ヘカテ」のメイン・ブリッジ。

すり鉢状に広がる巨大な司令室は、純白の壁が放つ間接照明と、空間を埋め尽くす無数のホログラフィック・スクリーンの光によって、まるで深海のように冷え切っていた。

何十名ものサイボーグ・オペレーターたちがコンソールに接続され、休むことなく膨大なデータを処理し続けている。

「司令。識別不明の船団を捕捉。数、およそ100。IFFに応答あり。アセンション・シスターズの巡礼船団と確認されました」

部下であるケイル少佐のくぐもった声が、電子音の飛び交う静寂をわずかに揺らす。

司令官リリス・ノヴァリスは、その報告に何の感情も見せず、玉座のような指揮官シートに深く身を沈めたままだった。

ケイルは報告を続けながらも、その視線を上官の姿から外すのにひどく苦勞していた。

滑らかな銀髪は彼女の祖である英雄セレナ・ノヴァリスを彷彿とさせたが、紫の瞳に宿る光は一切の温かみを感じさせない。

連合の美学において、女性は基本的に性的玩具かオルガ資源ではない。

彼女が纏う『インターフェース・ボディ』もまた、胸や下腹部を完全に露出させた黒い拘束ハーネスという悪趣味な産物だ。

しかし、リリス・ノヴァリスは例外だった。



感情を根こそぎ削ぎ落とされ、衣服というノイズすら排除して純粹な効率の塊に再設計された彼女は、「最高の生体部品」としてヘカテの司令官に据えられていた。

それ自体が、この施設の異常性を象徴している。

玉座の座面からは直立した極太のデータリンク・プローブが伸びており、彼女の蜜壺とアナルへ深々と挿入され、ステーションの中核システムと物理的に直結していた。

連合の最高司令官が、玉座のプラグに二穴を貫かれた巨大な生体部品として鎮座し、平然と指揮を執っている異常な光景。

ケイルの喉が、ごくりと鳴った。

しかし、リリス自身は己の裸体を晒し、体内をデバイスで蹂躪されていることに何の感情も抱いていない。

ステーションの生命維持、動力網、そして下層で蠢く数千体の『ルミナ・リリウム』の生体データ。

ベースとなる莫大な演算は下半身のメインプローブで処理されているが、常人なら一瞬で脳が焼き切れるほどの情報流が流れ込むたび、サブターミナルである両乳首の金属ピアスが、データリンクの同期を示すように青白く明滅する。

神経系への過剰なデータ干渉は、エラーとしての微弱な電気刺激を生み、彼女の肉体を強制的にバグらせていた。

情報処理の波が押し寄せるたび、ピアスに貫かれた乳首がビクビクと淫らに痙攣し、強制的に硬く勃起する。

同時に、莫大な通信負荷によって二穴の太いプローブが微小駆動するたび、静まり返った玉座からは、くちゃ、くちゃと、ひどく卑猥な水音が微かに響いていた。

漏電現象のように溢れ出した無意味な愛液は、座面に組み込まれた排液スリットによって「生体廃棄物」として音もなく吸引・処理されていく。

己の肉体がどれほどシュールで卑猥な音を立てようとも、リリースの紫の瞳は瞬き一つせず、空間に展開された数百のウィンドウを冷徹に同時処理し続けていた。

彼女にとって、眼前の巨大な三次元戦術マップに表示された敵影すら、無数に並行処理しているタスクの一つでしかない。

「巡礼船団……。この宙域を、何の断りもなく？ 冗談かしら」

リリスの声は美しい鈴の音のようでありながら、温度というものが一切感じられなかった。

彼女はまだ、これを「攻撃」であるとは断定していない。

だがその瞳の奥には、自らの完璧なチェス盤に予定外の駒が置かれたことへの、静かな探究心が宿っていた。

「航路、速度、進行ベクトルは？」

「はっ。現在、当ステーションの絶対防衛圏と直接交差するコースではありません。ですが、このまま進めば3時間後には我が方の防衛識別圏の境界線上を通過します」

「.....旧式の移民船と貨物船の寄せ集め。熱源も、武装も、取るに足りない」

リリスは視線を僅かに動かし、AIによる脅威分析データを脳内へ直接呼び出す。

スクリーンには、無数の「LOW THREAT（低脅威）」の文字が並んだ。

「アセンション・シスターズ……。情報部のプロフィールによれば、宗教を隠れ蓑にして男に肉体を売るだけの、原始的な娼婦集団に過ぎないとのことですが」

ケイルが、手元のデータと戦術マップを交互に見比べながら、硬い声で進言する。

「しかし司令。彼女たちの根底にあるのは非合理的な狂信です。予測不能な行動に出る可能性も……」

「ええ、分かっていますわ、少佐」

リリスは静かに頷くと、数百ある思考スレッドのほんの一部を割り、戦術AIに新たなシミュレーションを命じた。

「仮説を入力。対象船団が我がステーションに対し、質量兵器としての特攻を敢行した場合の被害予測を算出せよ」



スクリーンに、数秒で結果が表示される。

シールドへのダメージ、軽微。

施設外殻への損傷、3%未満。

迎撃成功率、98.7%。

「.....これが、彼女たちの『祈り』の限界性能。実に非効率」

リリスは、まるで子供の遊びを処理したかのような口調で呟くと、ケイルへと向き直った。

「ステーションの警戒レベルを、監視フェーズ2へ移行。エンゼル隊、第1飛行隊を出撃させなさい」

「迎撃でありますか？」

「いいえ。威力偵察です。船団に接触し、警告を発しなさい。『これより先、連合の特別軍事宙域である。速やかに針路を変更せよ』

と。そして、彼らがどう動くか、その一挙手一投足を記録するので  
す」

リリースは、まだこのゲームのルールを決めかねていた。

これはただの愚かな示威行動なのか。

それとも、この非効率な動きの裏に何か別の意図が隠されているの  
か。

彼女はすぐには答えを出さない。ただ盤上の駒を動かし、相手の次の  
一手を冷徹に観察するだけだ。

「少佐」

「はっ」

「もし、警告を無視し、1隻でも.....船団から離れてこちらへ加速  
する『駒』が現れたなら」

リリスの紫の瞳が、初めてケイルを真っ直ぐに射抜いた。

その瞳は美しい宝石のようでありながら、奥には絶対零度の宇宙が広がっていた。

「その時は、あの船団が『巡礼者』であることをやめ、『テロリスト』になったと判断します。.....対応は、あなたに任せますわ」

それだけを告げると、リリスは再び数百のタスク処理へと意識を戻した。

目の前のメインスクリーンを、下層の培養ウィングから送られてくる『ルミナ・リリウム』の最新生産データへと切り替える。

数千人の女性の強制受胎ステータス。

絶頂によるエネルギー搾取の推移。

そして、花を咲かせて命を吸い尽くされ、『廃棄』された母体の数。

命を徹底的に管理・消費するその地獄の数表に目を走らせながら、  
リリースにとってシスターズの船団は、もはやバックグラウンドで処理される些細な変数でしかなかった。

司令室の巨大なスクリーンには、何も知らずにゆっくりと死地へと近づいてくる無数の光点だけが、冷徹な静寂の中で映し出されていた。

## 第四章:殉教者たちの祈り

### 1. 欺瞞の巡礼と聖なる起爆装置

宇宙の漆黒に、無数の小さな光点が散らばっていた。

それはボロボロの貨物船や個人所有のシャトルで構成された、寄せ集めの民間巡礼船団だ。

それぞれの船内から聞こえる古びたスピーカーが流す賛美歌が、船体の隔壁に虚しく響く。

その旋律は通信チャンネルを通じて船団全体にブロードキャストされ、信者たちの心に静かに、だが確かに届いていた。

その船団から少し離れた宙域を、3機のオルガプレーン「エンゼル」隊が静かに旋回していた。

連合の監視部隊だ。

純白の機体はまるで空を舞う天使のように優雅だが、そのコックピットに搭乗する女性パイロットたちの瞳は、一切の感情を宿していなかった。

『エンゼル・ワンより報告。目標、識別信号「マリアの祝福」。巡礼船団に異常なし。規定の軌道に乗っていることを確認』

隊長の冷たい声が、ホログラム・スクリーンに映し出された数値の羅列を確認する。

彼女たちの高感度センサーが感知できるのは、それぞれの船から発せられる弱く不規則なオルガエンジンの熱源だけ。

それは無害な民間船団が放つ、ごくありふれた「低脅威」の数値だった。

だが、その欺瞞のベールの内側。

船体外殻に施された違法な吸熱・拡散コーティングと、極限までアイドリングを落としたオルガデバイスの静寂が、内包する莫大な臨界エネルギーを連合の目から完全に隠蔽していた。

旧式貨物船を改造した特攻艇『殉教者（マーター）07』のcock  
ピットは極端に狭く、鉄と機械油の匂いがした。

その奥には、動力源であるエレナ自身のオルガデバイスが発する、  
甘く生暖かい熱が充満している。

19歳のバトルシスター、エレナは、簡素な操縦席に深く身を沈め、  
眼前に広がる星々の海を見つめていた。

彼女こそがこの特攻艇の心臓部であり、そして『起爆装置』そのもの  
だった。

この船に積載された旧式反応炉の制御系は、彼女の膣奥に挿入され  
たオルガデバイスと物理的に直結されている。

パイロットが致死レベルの絶頂に達した瞬間に放たれる極大の生体  
パルスを『究極の信管』として読み取り、炉心のリミッターを強制的  
に焼き切って人為的なメルtdownを引き起こす。

それこそが、教団がこの船に施した「聖別」という名の魔改造の正  
体である。

隣の補助席には、ナビゲーターを務める男性信者が硬い表情でパネルを睨んでいた。

彼の手は、エレナの生体パルスを反応炉へと繋ぐ「最終安全装置」のレバーに置かれている。

素肌に直接触れる純白の極薄オルガスーツが、出撃前の極度の緊張で滲んだ汗で張り付き、まだ少女の面影を残す小さな胸の膨らみをくっきりと浮かび上がらせていた。

隣を飛ぶ何十隻もの『殉教者』たちの中にも、自分たちと同じように絶対の信仰を捧げる若いシスターと男性信者が搭乗している。

彼らも、私たちも、もう二度と聖域都市サンクタリアの土を踏むことはない。

(.....怖い.....)

ふと胃の底が冷え、手が震えそうになる。

その瞬間、エレナは隣の男性信者と視線が交差した。



彼の瞳に映るのは、彼女の命を散らすことへの悲痛な祈りと、死への覚悟が混ざり合った重い光だった。

(.....大丈夫)

エレナはその無言の視線に、ただ頷きを返す。

秘部の最奥に挿入されたオルガデバイスが、彼女を諭すかのように微かな振動で子宮を疼かせた。

そうだ。

私たちは、ただ死ぬのではない。

数日前、聖女長ベアトリーチェが見せてくれたヘカテ最深部の記録映像が脳裏に蘇る。

自分と同じ年若い女の子たちが、家畜のように冷たい培養槽に拘束され、魂のない快樂の中でただの「苗床」として消費されていく光景。

あれは地獄だ。

魂への冒涇だ。

あの子たちを解放するためならば、この命など惜しくはない。

## 2. 絶頂の信管と穿たれた死の穴

『——殉教者隊、突撃を開始せよ。神の御名の下に！』

通信機から響いた聖騎士長ユーディットの冷徹な号令が、恐怖にすくむエレナの背中を死地へと無慈悲に押し出した。

彼女は震える手で操縦桿を強く握りしめ、オルガエンジンのスロットルを一気に押し込む。

その瞬間、反応炉と同調し、簡素なシートの座面から膣奥へと深く突き入れられている極太のオルガデバイスが重低音を響かせ、子宮を内側から挟むような微弱な電流と振動がエレナの背筋を貫いた。

「あっ……んっ！」

機械の鼓動と直結した生々しい感触と同時に、急加速の殺人的なGフォースが軋む船体と共にエレナの華奢な肉体をシートへ叩きつけ、肺から空気を容赦なく絞り出した。

それに呼応するように船外で無数の爆砕ボルトが火を吹き、巡礼船に偽装していたダミーのカーゴ外装が一斉にパーズされた。

漆黒の宇宙空間に鉄屑が撒き散らされ、剥き出しになった大推力スラスターが蒼白いプラズマの噴射炎を上げる。

特攻艇は死を運ぶ鋭利な真の姿を現し、凄まじいGを伴ってさらに加速した。

その瞬間、宇宙の静寂は完全に破られた。

連合の監視部隊であるエンゼル隊のセンサーが、デブリの群れから突如として急加速する「異常な熱源反応」を捉えたのだ。

『エンゼル・ワンより報告！ 多数の敵機が、巡礼船団より分離！』

『馬鹿な……！ 先ほどまで熱源に異常はなかったはず……外装による欺瞞か！』

エンゼル隊からの警告がヘカテのブリッジに届くのと、要塞の分厚い迎撃レーザー砲塔が火を吹くのはほぼ同時だった。

無数の光の筋が、エレナたちに向かって殺到する。

『殉教者03、被弾！』

『くそっ！ ああ……ッ！』

通信機からは、次々と断末魔の悲鳴が聞こえてくる。

連合の迎撃網は、彼女たちの狂信すらも無機質な確率論で処理する絶対的な死の壁だった。

圧倒的な火力の前に、祈りを捧げる味方の特攻艇が次々とただの鉄屑となり、虚しく宇宙の塵となって散っていく。

だが、その散り様すらも狂信的な計算の内だった。

「ひっ……！」

エレナの船体にも数発のレーザーがかすめ、激しい衝撃と装甲が焼け焦げる異臭がコックピットを襲う。

警告音が鳴り響き、視界が赤く染まった。

気高さなど吹き飛ぶほどの、圧倒的で無慈悲な死の恐怖。

歯の根が合わず、少女の小さな身体がガタガタと無様に痙攣する。

もう、時間がない。

逃げ場もない。

エレナは泣き叫びたい衝動を必死に呑み込み、自らのオルガスーツの出力を手動で最終段階（オーバー・ドライブ）へと切り替えた。

瞬間、膣奥のオルガデバイスがこれまでにない凶悪な駆動音を立てて牙を剥いた。

子宮の最奥を容赦なく打ち据える暴力的なピストンと、極太の電極から放たれる致死量のパルス。

加速Gで砕けそうな骨の軋みに重なる、肉体を内側から焼き切るような凄絶な物理的激痛。

「あ、あああああッ！？ いやっ……ああっ！」

だが次の瞬間、デバイスが痛覚神経を瞬時にハッキングし、脳髄へ限界致死量を超える快楽物質（エンドルフィン）を強制的に叩き込んだ。

恐怖も激痛も、すべてが暴力的な快感に塗り潰されていく。

肉体は処理能力を超えた情報流によって破壊されているというのは、エレナの口の端からはだらしく涎が垂れ、目は白黒と裏返り、天に召されるような多幸福感に満ちた笑みが浮かんでいた。

極薄のスーツは、内側から噴き出した大量の潮と汗でぐしょぐしょに濡れそぼり、彼女の卑猥な曲線と硬く勃った乳首を透明に透かしている。

『エンゼル・ワンより司令部！ 対象から致死レベルの生体エネルギー反応！ 奴ら、絶頂のパルスを臨界させて突っ込んでくる気か！』

連合のパイロットが無機質な仮面を剥がされ、その理解不能で気味の悪い狂信に戦慄した時には、すでに遅かった。

先行して爆散した同胞たちのプラズマとデブリが、高密度のチャフとなって連合のAI照準をコンマ数秒狂わせる。

その血塗られた『肉の盾』と電子の淀みをすり抜けた、死に物狂いの数隻。

完全に理性が焼き切れ、涎を垂らしながら快楽の波間に沈みゆくエレナの視界の端に、要塞の分厚い装甲と、一筋の流れ星のように駆け抜けていく純白の機影が映る。

——アークエンジェル。フランドル様。

——どうか、あの子たちを。

それが、少女の脳裏をよぎった「最後の理性」だった。

その極限のイキ死にの様を、隣の補助席の男性信者は荒い息を吐きながら見つめていた。

死の恐怖は、眼前の少女が放つ圧倒的なエロティシズムと狂信によって完全に麻痺している。



彼は充血した目でエレナの絶頂を貪るように見つめ、引きつった笑みを浮かべながら、愛液で濡れそぼる彼女の太ももへと震える手を伸ばした。

「ああ.....聖女よ.....我らも共に、救済（ぜっちょう）を.....」

死の淵にあってなお、狂信と性欲をごちゃ混ぜにした祈りを捧げながら、男は彼女の太ももを撫で回した手で最終安全装置のレバーを引き下ろす。

エレナから抽出された莫大な生体パルスが、究極の信管として旧式反応炉へと一気に流し込まれた。

「ああっ、アアッ、アアアアアアッ！！ 神様あっ.....♥」

限界を超えた快楽に魂が完全に溶解落ち、少女の狂乱のイキ声がコックピットに響き渡った刹那。

エレナを乗せた特攻艇『殉教者07』は、迎撃のために開け放たれた要塞のカタパルトから飛び出してきた一機の量産型無人機『ハウンド』へと正面衝突した。

ただの質量兵器としての激突であれば、要塞の外壁はおろか、量産機特有の薄い黒鉄装甲を持つハウンド一機を道連れにするのがやっただただだろう。

だが、安全装置を失い行き場を求めた天文学的な生体電力が、炉内の反応質量と少女の肉体そのものへと一気に逆流。

それらを瞬時に数百万度の高密度プラズマへと強制相転移（メルトダウン）させたのだ。

暴走した莫大な臨界プラズマの閃光が、正面のハウンドを飲み込み、周囲の迎撃部隊を空間ごと球状に物理的に消し飛ばす。

さらにこの爆発は、単なる物理破壊では終わらない。

少女の死と極限の絶頂という『魂の汚染情報』を内包した生体EMP（オルガ・パルス）の余波が、開け放たれたカタパルトの入り口から要塞内部へと雪崩れ込み、無防備な管制ネットワークへと直撃したのだ。

オルガシステム特有の致死的な共鳴（シンクロ）を引き起こし、迎撃部隊を吐き出していた巨大な気密ハッチが青白い干渉光を散らして沈黙する。

内部から電子制御を焼き切られたそのハッチは、開いたままの状態ですべて完全に固着（フリーズ）し、同時に要塞の局所センサー網が過負荷によって一瞬のブラックアウト（盲目）に陥った。

圧倒的な絶望を、極限の快楽と祈りでねじ伏せた者たちの奇襲。

それが無敵の要塞に穿った局所的だが確実な「死の穴」こそが、後に続く者たちを深淵へと導く、何よりも尊く、そして残酷な道標となったのである。

## 機体設定『ASC-X01 アークエンジェル』



管轄: アセンション・シスターズ(スカイヴェイル極秘技術協力)

分類: フランドル専用 ハイブリッド強襲機

### 1. 機体概要

旧世代の異端機『セラフィム・アウラ』のコアフレームをベースに、天空の技術国家スカイヴェイルが秘密裏に技術供与を行い誕生した、銀河で唯一のカスタム機。

スカイヴェイルがもたらした『白銀の奈落』の精神感應波データが禁断のインターフェースとして組み込まれており、教団と空の民の異質な技術体系が奇跡的な融合を果たしている。

流麗な純白と金の装甲にはサファイアブルーに発光するナノ素材のラインが走り、背部の『ナノ・フェザー』が光の粒子を放つその姿は、まさに大天使(アークエンジェル)の名に相応しい神々しさと絶対的な威容を誇る。

## 機体設定『XA-07 ネクサス・プロト Type-H』



管轄: 世界統合連合(U.L.A.) / 第七生態系研究所『ヘカテ』

分類: リリス・ノヴァリス専用 試作型・要撃用オルガマシン

### 1. 機体概要

連合の「効率化」思想の到達点であり、パイロット自身を「生体コア」として完全に機体へ組み込む禁断の設計思想を体現したワンオフのカスタム機。

純白で神々しいアークエンジェルとは完全に対極をなす、昆虫や甲殻類を彷彿とさせる有機的で禍々しい漆黒のシルエットを持つ。

『百合の揺り籠』を護る最後の切り札として、圧倒的な暴力と絶望を戦場に撒き散らす絶対零度の女王の玉座である。

---

作品名: 白銀の天翔 揺り籠の夜宴

発行日: 2026年6月7日

発行者: XYZ\_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

### 【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

### 【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

### 【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。

---